

連歌師能順年譜稿 上

伊藤伸江

連歌師能順（寛永五（一六二八）〜宝永三（一七〇七））は、京都北野天満宮の宮仕であり、また加賀小松天満宮の初代別当となった人物である。彼は、京都と小松を往復しながら、小松天満宮の別当をつとめ、北野天満宮の学堂での月次連歌の宗匠をも長く勤めている。

能順の絶え間ない北野天満宮との接触は、小松天満宮を通して大きな影響を加賀の連歌に与えたであろうが、それがどのようなものであったか、といったことは今後の考究を待つ部分が多い。彼の動静自体も、京・小松の往還により、どのように小松に滞在したのか、長期間にわたっての併任ゆえ細かな点は不明な部分も多く、詳細にはとらえにくい。

だが、例えば、能順は生涯にわたり連歌師宗祇を尊崇し、晩年に迎えた宗祇二百年忌に際して、北野学堂で宗祇忌日の連歌会を開始し、この会は、能順没後も、北野の年預が主催する会としてあらためて存続していった。元禄・宝永という、連歌が次第に表舞台から退いていくと見える時期にも、宗祇の連歌を芸術的な頂点におき、宗祇関係の記念碑的行事を発起・維持する能順の営為により、北野学堂において後代へと連歌がつながれていく。それゆえ、稿者は、これまで連歌衰退時期と見なされていた、元禄・宝永期の捉え直しをはかる契機となる、一つの流れを作った重要な人物として能順を考えている。^①

能順の事跡は、はやく棚町知彌氏が「能順伝資料」をその十まで、「加能連歌壇史藁草」をその二（後）まで執筆され、北野天満宮の古記録から引用した資料や、能順の関わる連歌資料を翻刻紹介された。広く天満宮の研究をすすめる

中で、能順についても詳しく紹介され、現在の能順研究を主導し形づくられたといえる。さらに、綿拔豊昭氏が、石川・富山の連歌を研究する中で、小松天満宮関係の文学者として能順を考究され、『小松天満宮宝物殿竣工記念奉納 小松天満宮と能順』(2016・小松天満宮社務所)のような能順伝も執筆されている。また、北陸の文学史を考える際に無視することのできない重要な人物であるゆえに、地方史文献にも多く取り上げられ、必ず紹介されてきた。加えて、最近では、京都文化博物館での「北野天満宮 信仰と名宝」の展示(2019.2)に続き、石川県立歴史博物館の令和元年度秋季特別展「加賀前田家と北野天満宮」(2019.9)も開催された。この企画は、小松天満宮を造営し能順を招いた加賀前田家と、北野天満宮との関係を、あらためて捉え直す視点から構成されており、博搜され充実した展示資料により、能順関係資料の実見の機会も得られた。

しかし、能順その人に関して、まだ網羅的な形の年譜の公表はなされていないようである。そこで、諸先学の研究成果に学びつつ、新たな能順の年譜を示した。二〇一九年二月には、能順の住した小松天満宮で、能順筆の『角田川』が綿拔氏の調査で見いだされるなど、現在さらに研究が進みつつある。それゆえ、能順の事跡はこれからも数多く出現する余地があり、また集成時の見落とし等による不備もあるうと思われるが、年譜を公にすることも、研究の進展に利する一つの形にならうと思う。

この年譜には、連歌師能順の生涯の事跡をおさめ、日時が不明なものも年譜外に資料として収録した。年譜にはまた、必要と思われる場合には能順の父能舜の事跡も収め、能順が属していた北野天満宮の連歌関係行事も宮仕記録等により収めた。能舜は、連歌をよくし、『連歌総目録』によれば、彼の参加した連歌は、百韻六十三種、千句五種(うち独吟千句一)が残るが、紹巴や里村家、將軍家や前田家との関係を示す、能順へとつながる事跡を特に取り上げている。北野天満宮連歌関係行事は、そもそも主たる記録である宮仕記録やその下書、文書の記述が失われている場合があり、さらに記述のある時期であっても、宮仕記録では、一般に年預が決定するべき懸案事項の記録が優先され、月三度の定例連歌の記事がほとんど見られない場合もあった。加えて記録者により記述に精粗がある。このような点は留意す

べきだが、能順の動静と北野学堂の状況を重ねることで、能順と北野との距離感を見る上での参考となろうと思ひ、可能な限り収録した。

先学の業績の中では、棚町知彌氏と綿拔豊昭氏に多くの学恩を受けている。凡例においても、両氏の論は別途まとめ、それらを順に番号を付して区別して示した。棚町氏は、『北野天満宮史料』『学堂記録下書』や、小松天満宮などに収められた能順関係連歌資料等を翻刻の形で多く紹介されている。こうした翻刻資料を、年譜に反映させていたのだいた。また、綿拔氏には、②「小松天満宮連歌関係書目録稿」がある。これは棚町氏の業績を補完する形での目録であるため、能順関係のものは、連歌集に収録されるもの以外は省略した形の目録となっているが、小松天満宮の貴重な資料の継続調査の成果であり、年譜に反映させていただき、反映の際には、必要に応じ目録稿のページを記させていただいた。なお、棚町氏と綿拔氏の資料翻刻、目録で同一作品につけた作品名がちがう場合がある。(綿拔氏目録はそのまま、棚町氏は選択して翻刻しているため、内容を反映して詳しい名をつけている。例えば、綿拔氏目録『連歌集』(p25)は、棚町氏では『快全・能順等百韻連歌集』(④⑤⑥⑦に一部の翻刻収載)であり、綿拔氏目録『連歌集』(p28)は、棚町氏では『能順・快全・歛生等連歌書留』(⑤⑥⑦に一部の翻刻収載)である。)このような作品に収められている連歌の伝本の情報は、判別の必要上、棚町氏の使用した詳しい作品名の略称で記し、綿拔氏の目録ページを付加し同一であることを示している。

事跡の後には括弧書きで典拠を示した。加えて『聯玉集』(小松天満宮蔵)所収の場合はその旨『連歌大観三』の句番号と共に記した。なお、『能順自筆発句書留』など他の集と『聯玉集』の句や詞書が相違する場合がある。一般に『能順自筆発句書留』に句がある場合は其形を示し、『聯玉集』の番号を添えているが、両者の形の相違は示しており、また必要と思われる場合は『聯玉集』から句を示す場合もある。「句」(書留、聯)のように、略号で引用句の次に引用テキストの作品名をまず示し、他本にあることはその後の作品名略号に示した。

これらに加えて、能順弟子歛生の句集『新梅の雫』からの引用は、『新修小松市史資料編7 文芸』(平成十八・新

修小松市史編纂委員会)によった。

以上のような操作を経て、年譜の上(本稿)には、元禄五年まで、下(愛知県立大学説林)第68号・令和二年三月発行)にはそれ以降と年時不明の作品をおさめた。合わせて参照されたい。

注

(1) 伊藤伸江「能順の宗祇追慕―能順年譜を手掛かりにして―」(愛知県立大学説林)第68号・令和二年三月)本年譜作成にあたり、奥田勲氏との科研費共同研究、討議から多くの示唆を得たことを記し、お礼申し上げます。本稿は JSPS 科研費 JP17K02421「独吟百韻分析による宗祇連歌の多面的新研究」の助成を受けたものである。

能順年譜凡例

年譜引用文献・資料と略号一覧

年譜引用にあたり略号を用いた場合には、それを示した。論文では頭に、他は末尾に示す。

また、『連歌総目録』、『新編国歌大観』CD-ROM、『新編私家集大成』CD-ROMを参照、反映している。

【棚町知彌氏関係資料・論文】(副題は略したものがあつる。また、題は初出時のものとする。)

- ① 〔北野社古記録(文学・芸能記事)抄(一)〕(〔有明工業高等学校紀要〕4号・1968、12)
- ② 〔北野学堂連歌史資料集(貞享年間)〕(〔近世文芸資料と考証〕6号・1974、2)
- ③ 〔能順伝資料・その二(預坊時代・前)〕(〔有明工業高等学校紀要〕11号・1975、1)
- ④ 〔能順伝資料・その三(預坊時代・後)〕(〔有明工業高等学校紀要〕12号・1976、1)
- ⑤ 〔能順伝資料・その四 宗因点『延宝五年仲秋 北野三吟連歌』(〔近世文芸資料と考証〕10号・1978、2)

- ④ 「加能連歌壇史藁草」(『白山万句—資料と研究—』(昭和60・白山本宮、白山比咩神社))
- ⑤ 「資料紹介 能順時代人の連歌史観・参考資料」(『連歌研究の展開』(昭和60・勉誠社))
- ⑤ 「加能連歌壇史藁草・その二(前) —能順伝資料・その五—」(『国文学研究資料館紀要』11号・昭和60・3)
- ※⑤末尾の翻刻「天和三年より能順発句書留」は、⑦に『能順自筆発句書留』として再度編集後再録、引用は⑦によることとする。

- ⑥ 「加能連歌壇史藁草・その二(中) —能順伝資料・その八—」(『国文学研究資料館紀要』13号・昭和62・3)
- ⑦ 「加能連歌壇史藁草・その二(後) —能順伝資料・その十一—」(『国文学研究資料館紀要』15号・平成元・3)
- ※⑦に納められた能順筆「おほる」に関しては、棚町氏の推定にしたがい、作者は能順ではないと見る。内容に関する能舜の没年も棚町氏に従い寛永十九年としておく。

- ⑧ 「北野宮仕(中) という歌学専門職集団の組織と運営の実態(資料編)」(『社家文事の地域史』(2005・思文閣出版))
- ⑨ 「霊元院と能順」(『小松天満宮だより』第四号・1988・4)

【綿拔豊昭氏関係論文】

- ① 「新出の能順書簡について」(『加南地方史研究』第65号・平成30・4)
- ② 「小松天満宮連歌関係書目録稿」(『連歌俳諧研究』第85号・1993)
(能順関係のものは、連歌集に収録されるもの以外は省略との由)
- ③ 『小松天満宮宝物館竣工記念奉納 小松天満宮と能順』(2016・小松天満宮社務所)
- ④ 『越中の連歌』(1992・桂書房)
- ⑤ 『松尾芭蕉とその門流—加賀小松の場合—』(2008・筑波大学出版会)
- ⑥ 『近世武家社会と連歌』(2019・勉誠出版)

【その他諸氏論文等】

- A 桂井未翁「能順遺愛の連歌文書」(『連歌と俳諧』第二卷第三号・昭和12・8)
- B 宗政五十緒「連歌師能順の周辺―『近世畸人伝』私記―」(『あけぼの』7巻5号・1974)
- C 柳瀬万里「能順と小松天満宮」(『あけぼの』9巻5号・1976.10)
- D 北野勝次「小松に於ける能順」(『加南地方史研究』48号・2001.2)
- E 尾崎千佳「能順と宗因―西山宗因全集発刊を記念して―」(『小松天満宮だより』第21号・平成17・8)
- G 竹内秀雄『天満宮』(昭和43・吉川弘文館)
- H 島津忠夫『宗祇の顔』(2011・和泉書院)
- I 福井久蔵『連歌の史的研究前編』(昭和五・成美堂書店)
- J 同『連歌の史的研究後編』(昭和六・成美堂書店)
- イ 井本農一「宗祇肖柏宗長三吟 宗祇独吟 能順独吟 一冊」(『実践女子大学文芸資料研究所年報』2・1983.3)
- 鉄 小林健二「鉄心斎文庫総目録稿」(『国文研共同研究成果報告』・2019.3)

【図録・史料・全集等】展示史料に関しては、図録名の後に番号を示す。

- 〔加賀前田家と北野天満宮〕(令和元年度秋季特別展・2019・石川県立歴史博物館) 石歴展
- 〔北野天満宮 信仰と名宝 天神さんの源流〕(2019・京都文化博物館) 京文展
- 『北野社家日記 第四』(1973・続群書類従完成会) 社家四
- 『北野社家日記 第五』(1973・続群書類従完成会) 社家五
- 『北野社家日記 第六』(1973・続群書類従完成会) 社家六
- 『北野天満宮史料 宮仕記録』(1981・北野天満宮史料刊行会)

宮正

- 『北野天満宮史料 宮仕記録 続一』(1996・北野天満宮史料刊行会) 宮一
 『北野天満宮史料 宮仕記録 続二』(1997・北野天満宮史料刊行会) 宮二
 『北野天満宮史料 宮仕記録 続三』(1999・北野天満宮史料刊行会) 宮三
 『学堂記録下書』(北野社家記録(東大史料編纂所写真帳 請求記号6112-93))
 『加賀藩史料』(1981・清文堂出版、東大史料編纂所データベースに収録) 加藩史
 『新修小松市史 資料編7』(2006) 松史資7
 『小松天満宮誌』(1982・小松天満宮)
 『西山宗因全集』第四卷(2006・八木書店) 西四
 『寛永廿一年誹諧千句』(1992・西日本国語国文学会翻刻双書刊行会) 寛

【所蔵者と史料の略号】

所蔵者(図書館、文庫等)及び、そこに所蔵されている作品。※はその右の所蔵者にかかる所蔵品である。所蔵品のうち頻出のものに関しては、煩瑣を避けるため略号を使用しそれを示す。また、翻刻されているものは、翻刻論文を示した。

富山市立図書館山田孝雄文庫…山

※『北野能順連歌并連歌合』…山北

石川県立歴史博物館…石歴

金沢市立図書館…金

※『松雲公最終遺編類纂』…金松雲 ④⑤翻刻

※寛文四年五月吉日夢想連歌原懐紙(六九一九六)

金沢市立玉川図書館近世史料館…史

金沢市立玉川図書館近世史料館藤本文庫…史(藤)

小松天満宮…小

※『快全・能順等百韻連歌集』…快能 ④⑤⑥⑦翻刻

※『能順自筆発句書留』…書留 ⑦翻刻

※『能順・快全・歛生等連歌書留』…能快歛書留 ⑤⑥⑦翻刻

※『聯玉集』…聯

※『新梅の雫』翻刻『新修小松市史 資料編7 文芸』(平成十八・新修小松市史編纂委員会)

北野天満宮…北

天理図書館…天理

※『連歌集 宗養等百韻外』(れ4:2-30)

阪大含翠堂(土橋) 文庫…阪

※『連歌集』(H8・19)…含連(阪) 翻刻 ⑥

早大伊地知文庫…早

鉄心斎文庫…鉄

国立歴史民族博物館所蔵高松宮本…高

東大史料編纂所北野光乗坊文書…光

年譜

天正十七年(一五八九)

十月十七日

能舜、紹巴の使いとして、北野松梅院禪昌・禪昭を呼びに行く（用件は『狭衣物語』巻二の書写依頼（十月十八日条）。（社家四 ①）

同二十六日

禪昌、狭衣の本を能舜を通して紹巴に返却。（社家四 ①）

文祿元年（一五九二）

一月三日

北野にて裏白連歌あり。能舜出座（一句）。連衆は、禪永・紹巴・禪興・昌叱・禪祐・禪昌・禪昭・玄仍・惠覚・宗務・了喜・景敏・能札・行康・能舜。発句「うぐひすの初音をけふの朝戸かな」。（筑波大北野11）

文祿三年（一五九四）

某日

能舜、懐旧百韻に参加（出句数二）。連衆は、家忠・紹巴・昌叱・政盛・他阿・玄仍・覚阿・景敏・実頼・為舟・氏長・弥阿・能札・能舜。発句「とふ跡は春もみしかし草の原」。（国会連歌合集48）

某日

能舜、何人百韻に参加（出句数二）。連衆は、家忠・康綱・紹巴・昌叱・玄仍・信嶺・底相・宗可・玄仲・頼純・資久・宗頓・能舜。発句「月のゆく興中川やあさ氷」。（書陵部501―240）

慶長元年（一五九六）

九月四日

昌叱・玄仍・昌琢等一座の千句あり。能舜、執筆で出座（十の百韻で全て出句数二）。（松平本142―22）

慶長四年（一五九九）

一月三日 北野にて裏白連歌あり。紹巴が連衆を選んだため、宮仕四人が連衆に参加する異例あり。紹巴、連歌からの帰途、能舜の所に立寄る。（社家五）

一月二十八日

里村玄仍、松梅院禪昌に、宗砌の北野会所連歌新法十八条の書写と授与を願う旨、能舜を通じ申し入れる。禪昌、当所の新法は不出ゆえ、能舜がよそで求めて玄仍に授与するように指示する。（社家五）

十月十日

松梅院禪昌と里村玄仍、高尾の紅葉見物に出かける。帰りには能舜による粥振舞あり。（社家五）

十一月二十三日

連歌あり、能舜、松梅院禪昌へ、檀那方の要望をとりもつ。（社家五）

慶長五年（一六〇〇）

五月二十二日

能舜宅にて月次連歌あり、昌叱出席。（社家五）

慶長七年（一六〇二）

一月二十七日

承仕能舜の所にて山中長俊連歌興行、昌叱出席し、能舜を折檻する。（社家六）

慶長九年（一六〇四）

八月十二日

能舜、『人何百韻』に出座。連衆は、紹由・宗頓・了俱・宗安・慶純・道味・浄和・需尊・祐甫・宗通・住円・宣滋・玄仲・心也・能札・能舜。能札二句、能舜六句出席。発句「月みよといはぬやまさる萩の露」。（京大平松文庫（7ーシー25））

慶長十一年（一六〇六）

この年以前三月十五日 能舜による病氣平癒の祈祷連歌に対する、徳川秀忠からの礼状あり。（北 ③ 石歴展41）↓
宝永元年十月十四日（宮三） 石歴展資料解説は、秀忠礼状は慶長五年以降、十一年以前に出されたと推定。

慶長十五年（一六一〇）

八月二十五日 増上寺の住持存応（普光観智国師）が、徳川家康の夢想連歌の句（「植えおきし竹の一本かすそひて
／茂れる松の夏ふかき色」）を能舜に伝える。（北 ③ 石歴展40）この句は、能舜家の家宝として蔵された後、能順により北野天満宮に寄付された。↓宝永元年十月十四日（宮三）

慶長十七年（一六一二）

十一月六日 中老能作、宮仕次第を書付け、松梅院禅昌に提出。能舜の名あり。（社家六）

元和七年（一六二一）

十一月二十六日 前田利常と子らの句を初折表に置く賦何人連歌あり、発句「春近き榮えや梅の花の宿」（前田利常^マ、脇前田利光（利常）。（史（『連歌問答記』）⑥）※綿抜氏⑥にこの連歌（第九句から第九十八句まで略されている）が翌年六月十六日の賦何路連歌と同形式であれば、能舜が十句目に出座し、主となって卷いた祈祷連歌かとの推定があり、能舜と前田家のつながりが読み取れることになる。その際、発句作者利長（慶長十九年没）は誤りで張行年月日は正しいと見る。

元和八年（一六二二）

六月十六日

前田利常と正室天徳院、利常子らの句を初折表に置く、北野宮仕らが参加した賦何路連歌あり、発句「涼しさの心の松や千世の陰」（御上（天徳院）、脇前田利光（利常）、能舜十句目に出座、十一句出詠。（金松雲）④③⑥）

六月二十九日

能舜あて前田利光（利常）書簡あり、能舜が利常の妻の病氣平癒の祈祷をなしたことの礼を述べる。（元和八年六月廿九日付前田利光（利常）書簡（小松天満宮蔵）⑦石歴展44③③）

寛永三年（一六二六）

四月十二日

能舜、玄仲興行の紹巴二十五回忌懐旧連歌に参加し、八句を詠む。連衆は、玄仲・玄的・玄陳・昌俣・慶純・宗順・了俱・友繼・能舜・吉真・宣滋・能吉（一句出座）。発句「花やあはれなきかこと葉のなとり草」。〔太宰府天満宮小鳥居家本（小連72）〕

寛永五年（一六二八）能順一歳（数え年）

三月二十七日か

誕生。元禄十年三月二十七日に七十賀の催しがあることから、三月二十七日もしくはその前後の月日の生まれか。③北野宮仕の上大路家出身。祖父能重、父能舜の四男。能順の幼名竜千代丸（GI）。

寛永十六年（一六三九）十二歳

一月一日〜二十八日 能舜、独吟千句をなす。第一百韻発句「世にあふく星か梅咲今朝の松」。〔小②〕

寛永十七年（一六四〇） 十三歳

能舜は五十年忌、六十年忌から逆算するとこの年に死去だが、⑦の寛永十九年春まで生存説に従う。

寛永十八年（一六四一） 十四歳

二月八日 永禄十年正月十四日に定めた衆中法式に対する起請文の新規の連判中に能順名あり。（宮正）

寛永十九年（一六四二） 十五歳

春 能舜、病の床に臥し死す。（「おほゑ」(小) ⑦）

寛永二十一年（一六四四） 十七歳

六月十六日〜十八日 能順、『俳諧千句』に出詠。連衆は松江重頼、梅盛、重貞、重供、重方、宗鍾、意敬、長好、久

重、道二、貞義、安利、正長、能利、能順。能順はすべての百韻に一句のみの出詠、執筆。（寛）③）

正保二年（一六四六） 十九歳

四月二十四日 北野天満宮で寄合あり（能順の記名に点かからず、欠席か）。（宮正）

正保三年（一六四七） 二十歳

二〜三月 能曷・能利兄弟が自宅で会席料を定めて俳諧万句をなしたため、衆中より非難、能利は俳諧を停止し

衆中と和合し、能曷は停止しなかったため、衆中勘当、後に両者共詫びを入れ、起請文をもって和

合。（宮正）

三月二十六日

能曷の俳諧の件で老若会合の際、能茂・能令・能利・能順・能拝は、能曷の兄弟ゆえ、在世の間能曷と一言も口をきかないという勘当状を衆中に渡す。(宮正) ※能順には、兄能茂・能曷・舜能、弟能拝がいるとされるが、この記録からは能曷と能利・能令も兄弟として名があがる。『沙汰承仕家系同別家之図』(北野天満宮蔵 石歴展77)では、能利は舜能の子として名があり、能令は見えない。また、貞享五年二月二十二日付『衆中親子書』で、「能利俊能子」(宮一)、元禄四年三月二十二日の『衆中名次第』でも、「能利舜能子」(宮一)である。能令は両書にも名は見えず、近いところでは慶安三年八月十九日条に名が見えるが、係累については情報がない。能利は寛永十八年二月八日の起請文に能曷、能茂、能順と共に名が見え、寛永二十一年六月の『俳諧千句』にも名が見える。ただしこれは第一巻の脇句一句のみの出詠である。その他、能利は、元禄七年(二六九四)四月末の宮仕記録に能順、常久と共に名が見え、その後もしばしば見える。『衆中親子書』に見える舜能子能利と別に、能利を名乗る能順の兄弟がいたか、後考を俟つ。

慶安三年(一六五〇) 二十三歳

五月下旬

『頭書伊勢物語』を記す。(鉄『能順筆頭書注釈書草稿本』自筆草稿本(98-113)(鉄) 凶録7-14写真)

八月十九日

年預頭の能典より、宮仕たちに呼び込みについて指示あり。(宮正)

慶安四年(一六五一) 二十四歳

四月五日

將軍(徳川家光)平癒祈禱の万句、松梅院にてあり。預法橋能円が、目代より先に出詠。(宮正)

慶安五年（一六五二） 二十五歳

二月二十五日 天神七百五十年忌連歌あり（万句のうちの百韻）。発句は良尚法親王（能円の代作）で「咲華も天満
神の光哉」。連衆は北野宮仕。能順一句出座。（北宮正）

五月十二日 後水尾院が連歌を興行し、能円に関して、若い頃からの紹巴の弟子で、和歌連歌学問に堪能と賞賛す
る。（宮正）※能円は、例えば慶長三年六月五日張行の紹巴・昌叱らの百韻や、同年七月二十九日張
行の昌叱らの百韻（能札八句、能舜七句出詠）で、一句のみ出詠し、文祿から慶長の初め頃、能舜が
なしていた執筆の役割を果たしていると思われる。能円の連歌学習歴はかつての能舜と同じ道筋をた
どる形であつたろう。

明暦二年（一六五六） 二十九歳

二月二十五日 賦何路百韻が張行される。「天満宮御建立 御迂宮ノ時」発句は前田利常「うつし植て花もはしめの
宮る哉」、能順第六句に出座。（史『連歌問答記』⑥）

八月 前田利常より小松天満宮初代別当に任じられる。

九月二十五日 賦玉何連歌が張行される。発句は前田利常「一松に菊千年かさなる家居哉」、能順第六句に出座。（小

D ⑤ ④ a 石歴展（68）③⑤）

十一月十四日 前田利常より能順に知行百石を付す。（『知行所付』（小）D 石歴展82）

秋 この年の秋の詠か、「加州へ始てくたりし時／朝霧やへたてゝも又越のうみ」あり（聯玉集544 D）。

明暦三年（一六五七） 三十歳

二月十五日 小松郊外の梯の天満宮、造成なる。（菅家見聞集・三壺記・金沢古蹟志）加藩史）

二月二十四日 小松天満宮遷宮。(3)

八月二十五日

小松郊外梯天満宮において、社頭始の月次連歌を行う。賦何田連歌、執筆北野能親、発句前田利常

「千世の秋神や告げん松の声」、能順第六句目出座。(菅家見聞集(加藩史)(小 D ④(金松雲) ⑤⑤

⑥)

万治元年(一六五八) 三十一歳

十月十二日

前田利常死去、能順、追悼連歌の発句をなす。「黄門利常卿薨し給ひし時/落葉して下にかくれぬ嘆

哉」(聯 858 ③)

万治二年(一六五九) 三十二歳

九月十九日

能順、江守是屑興行の薄何連歌に参加する。連衆は昌程、昌陸、守治、値存、城湖、正長、正的、有

木、元流、右勃、能順。発句「雪をきて白山の名や秋の月」(昌程)。能順は第五句に出座。(向島秀

一氏所蔵連歌集④)

万治三年(一六六〇) 三十三歳

十月

永原孝治の悼の発句をなす。「晨明の影はむなしきしくれ哉」(聯 854)

寛文元年（一六六一） 三十四歳 年預（組子）をつとめる。(1)(3)

寛文四年（一六六四） 三十七歳

五月吉日 夢想之連歌に出座。夢想の句「梅はいつくそ香はもとめけり」、発句「陰ふかく千年の春の宿の松」

(元林)、能順第三出座。(金)(4)(5)

閏五月二十七日 この日、他行の者として能順の記載あり。(宮正)

寛文七年（一六六七） 四十歳 年預（組子）をつとめる。(1)(3)

寛文九年（一六六九） 四十二歳

一月吉日 夢想之連歌に出座。発句「玉松もおらんはかたの心くさ」、能順は第三に出座。(小) 快能(5)(4)

一月十五日 能順、神人の事につき、一乗寺へ能貨・随珎・能玉・能東と参上する。(宮正)

一月十九日 能順、能寛・能通・随珎と徳勝院禪嘉のもとに参上する。(宮正)

一月二十四日 迁宮について二月四日と決まり、宮仕からは立願の千句連歌を申す。(宮主)

一月二十六日 迁宮について能貨・能順が友世の所に参上する。(宮正)

二月二十八日 宮仕による立願千句あり。(宮正)

閏十月二十八日 宮仕による内々の祈禱千句あり。(宮正)

十一月二十四日 先月二十八日の千句の清書完成、神前に備え、迁宮前の立願を終える。

寛文十一年（一六七二） 四十四歳

一月 夢想之連歌、発句「雪はけになからの山の光哉」、能順第六句に出座。（小 ② p25 ④）

延宝三年（一六七五） 四十八歳

四月二十日 江守是屑の追善独吟百韻をなす。発句「しる人のなきや忍音ほとゝきす」（『聯玉集』369）、伝本は、

快能（小 ⑥、② p25）、「是屑懷旧百韻」（小 ② p29）史（藤）等。

某日 友雪・重幸・能順の「懷旧百韻連歌」あり。この連歌には連歌師昌程・昌隠・昌悦・打雨・能通・随

珍・正的・宗因による点がある。（『北野連歌』（小）③）

延宝四年（一六七六） 四十九歳

一月一日 賦山何連歌に出詠。発句「事なしに年や越来て今日の春」（預法橋能由）。連衆は、能由・能把・能

勢・能育・能在・能覚・能曷・能海・能順ら北野宮仕。（光491）

延宝五年（一六七七） 五十歳

八月 北野において能通、随珍と三吟の何路百韻を催す。発句能順「荻の声いづち行らん今朝の露」。西山

宗因が批点、浅井政右が正供宛注をなしている小松天満宮本（『延宝五年仲秋於北野三吟連歌』A

『西山宗因全集』第四卷）がある。（小 ④ ⑥ E 西四、史（藤））（聯玉集593）

延宝六年（一六七八） 五十一歳

八月 百韻あり。（発句浅井政右「高き名は思はし恠し秋の月」、連衆は政右、元流、能順、円助。能順第三

出座。(小 快能 ④ ⑦ ②)

延宝七年(一六七九) 五十二歳

春 板津檢校正的(延宝七年没)の死に際して発句を詠む。「板津檢校正の悼に／おしむへき春をおくらす別哉」(聯282)

延宝八年(一六八〇) 五十三歳

二月十四日 横井玄位等千句にて、能順第十百韻発句「春秋の梢や埋む今朝の雪」のみ出座。(小 ④ ② ② p22)

三月 北野にて能通、随珍と三吟で、四百韻をなし、能順、第一と第三百韻の発句を詠む。第一百韻発句「遅桜うれしき春の名残哉」(能順)(聯玉集269)、第二百韻発句「したはるゝ春のとまりはこゝろかな」(随珍)、第三百韻発句「花に月光をちらす木の間哉」(能順)、第四百韻発句「花に影月に色ある夕かな」(能東)。(含連(阪) ⑥ 小 ③ 史(藤))

三月か

北野にて『能通・随珍・能順三吟百韻』(発句「朝夕にうつるこゝろや花さかり」(能通)、能順第三出座。西山宗因が批点をなしている小松天満宮本『連歌点 延宝八年 北野点取』がある。(小 E 西四 含連(阪) ⑥ 史(藤)) 右の四百韻と同時期か。

延宝九年(一六八一) 五十四歳

一月十九日 能順、政右、能通、能珍、能拝、能東、能二と『三六番前句附連歌合』を行う。(『三六番前句附連哥

合』(阪) ⑥、山北 ③)

夏 西小路能養の家が修理を加えられ、連歌稽古と神歌儒の学問所となる。(『学堂記録下書』 ① ⑧ G)

九月十日

直忠家二見瀉文台開の『何木百韻』にて、能順発句「影うすす月や玉連二見瀉」をなす。(快能④)

小② p26 史(藤) 史(藤)の発句は「影うつつ月や玉匣二見瀉」。「影うつつ月は玉くしけ二見瀉」。

(聯 645)

天和三年(一六八三)

五十六歳

一月

能順、浅井政右と両吟百韻をなす。発句「解初て水にまかする氷哉」(右(政右)(小 p25))

三月

延宝九年に買い取った西小路能養の家を学堂と定める事を周知。(『学堂記録下書』①⑧③G)

五月二十七日

預法橋能在の学堂月次会始発句「ことのはに茂れ神松世々の陰」。(『学堂記録下書』①⑧G) 能在発句を代作と能順記す。「学堂月次始 法橋能在坊作代/神松の言葉茂れ世々の陰」。(『能順自筆発句書留』(小)⑦(6)) 「連歌会・歌儒講尺之日限并法度之条々」を規定。(『学堂記録下書』①G)

閏五月三日

学堂の稽古月次会始。能順、加州より上京し、学堂月次会の宗匠をつとめる。能順、九月まで月次連歌の宗匠をつとめ、十月から毎月三日は能通、十七日能拝、二十三日随榮がつとめる。その他細則を定める。(『学堂記録下書』⑧①③G)

閏五月

『能順自筆発句書留』に発句7〜12あり。⑦

『西本願寺下勝満寺行誓興行/夕露の螢にそよく草葉哉』(7 聯 403 「草葉に戦くほたる哉」)

『桔梗屋七左衛門正信興行/壬五月/雨長し今年まれなる五月哉』(8 聯 387 「ことし更なる」)

『大森三郎兵衛好治興行/風露の色にも竹の若葉哉』(9)

『石河正謙興行/平岡之山庄 於更幽軒/郭公山かすかなる行ゑ哉』(10)

『有馬涼及興行/陰涼しさそ仙人の宿の松』(11)

『石河正謙 北野之家ニ而/興行/松風や聞渡るさへ下涼み』(12)

六月七日

秋

浅井政右妻女の悼の発句をなす。「浅井源右衛門政右妻女ノ悼／床夏の契も露のうき世哉」(13)

『能順自筆発句書留』に発句14、19あり。⑦

『菱屋庄兵衛重直興行／裁残す木の間は月の砌哉』(14)

『桔梗屋六右衛門正治興行／岡崎之家ニ而／山里やおもふによらは秋の月』(15)

『菊屋理右衛門直之興行／当春家作りタルニ／紅葉にも心見えけり家桜』(16 聯757)

『能作家之床ノ内ニ狩野縫殿助／松梅をゑかける時 発句所望し／ければ／うつし絵はおもふ色そふ梢哉』(17)

『玉泉寺其阿母ノ悼ニ京ヨリ／哀いかにおもふ袖さへ野への露』(18)

『梢に色鳥あつまりたるをみて／色鳥の色をあらそふ木の実哉』(19)

能順、加賀に向かう。「宮仕記録下書」①⑧

冬

『能順自筆発句書留』に発句1、5あり。⑦

『妙心寺 龍海餞別之詩韻之／和 盟字／めぐりあはん盟りや時雨松の風』(1)

『加州に下りテ／由比孫兵衛正及妻女悼／風さむしいかにむなしき夜半の床』(2)

『本多安房守政長興行／松の風いく夜つもりて今朝の雪』(3 聯899 「松風のしくれてつもる」)

『今枝内記直方興行／月清しあまる光や玉霰』(4)

『浅井源右衛門政右宅ニ而 直忠・正供四吟／降にきと告しやくくて宿の雪』(5 聯925)

貞享元年(一六八四)

五十七歳

二月二十四日

二月二十五日法楽のために、本日学堂において連歌あり。預法橋能在発句、衆中残らず出座。今後の

恒例とする(「此会毎歳為今日恒例 永々可被相勤者也」)。「学堂記録下書」①G

六月十二日

岩崎和泉守、二月二十四日に学堂にて行う、二月二十五日法楽連歌の会料として、金子二両寄進（貸付利子を会の運営にあてる）。（宮正 ①G）

九月十九日

長子教順（養子：綿拔③）におくれて哀傷の独吟百韻を詠む。発句「したはしよ残るそ恨老の秋」。

（聯玉集816「教順か悼に」「しのはしよ」）③ 能快歎書留（小）⑥②p28、快能（小）②p25 能快歎

書留（小）⑥、快能（小）⑥、③

貞享二年（一六八五） 五十八歳

二月二十日

二月二十四日の学堂連歌の触状を神前に置く。預能在発句。毎年恒例の法楽。（「此法楽毎年懈怠有間敷者也」）（宮正 ①G）

二月二十二日

後西院崩御。

二月二十三日

学堂月次連歌、また明日の学堂の法楽連歌、後西院崩御により延期。

三月二十三日

学堂看板が作成される。後西院崩御から三十日たち、今日より学堂の連歌始、連歌月次の会あり。

（宮正 ①G）

三月二十四日

延期とされた二月二十四日法楽連歌、本日あり。（宮正）

六月七日

能順、小松天神社の由来書と宝物目録を寺社奉行に提出。（史『寺社由来』（16:61-725））

八月四日

連歌あり。（宮正）

九月二十二日

能順、山代千句に出座。浅井政右の興行、第一・第七百韻発句能順。連衆は能順、竹田五郎左衛門忠

十月四日

張、前田清八直忠、浅井源右衛門政右、浅井源太以政、半田治大夫正好、口之内可春元習。（小）

貞享三年（一六八六） 五十九歳 年寄となる。（①③）

一月十三日 学堂にて、能貨、源氏物語の講釈を開始する。（宮正 ①）

一月十七日 学堂月次始あり。（宮正 ①G）

二月十五日 奥田仁左衛門、二月二十五日の法楽連歌の会料として、金子二両を寄進。（宮正 ①）

二月二十四日 学堂連歌あり。（宮正）

三月四日 学堂月次連歌、宗匠能拝で開催（宗匠能通病気のため）。（宮正 ①）

三月七日 学堂月次連歌、宗匠能東で開催（宗匠能通病気のため）。（宮正 ①）

三月十七日 能通病気につき、学堂の連歌延期。（宮正）

三月二十八日 学堂月次連歌宗匠能通死去。（宮正 ①）

三月 能順、今枝直方の命により『角田川』書写（外題浅井政右）。（小 2019年3月3日の小松天満宮ブログによる）

四月二十一日 衆中の居室の書付を松梅院へ渡す。能順、右近馬場東側にある家を所有。「同（稿者注、右近馬場東

側一）、家一軒裏長屋一軒 能順」（宮正）

六月頃 能順、加州より上京か。（①）

六月十二日 土佐常昭へ見回り。（宮正 ⑥）

六月十三日 北野学堂にて前句付を始めること、また勝った回数が多い者が翌年の二月二十五日の連歌の脇句を務める旨を周知。（宮正 ③）

六月十七日 能順ら年預衆、随吟坊宅で土佐常昭の振舞を世話する。（宮正）

六月十九日 学堂連歌の会。万句に至り竟宴。夜、学堂勤学之定書を相談。「連歌宗匠能順坊・能拝・能東、歌書、源氏物語能貨坊」（宮正 ⑧G）

六月二十六日 北野学堂にて前句付開始。点者能順。(宮正 ①③)
 八月四日 学堂連歌あり。

八月十五日 八嶋にて能順の年寄就任祝の酒肴を出す。十月末に加州下向のため今日に変更。(宮正 ①)

九月十六日 学堂勤学之定書を衆中に申し渡す。(宮正 ①G)

十一月六日 初雪の会あり、当人能東。学堂連歌の会延期、宗匠能拜。(宮正 ①)

十二月六日 学堂連歌の会、能範子死去により延期。(宮正 G (ただし十一月六日と誤る))

貞享四年(一六八七) 六十歳

一月六日 学堂月次の会あり。(宮正 ①)

一月十日 学堂前句付、発句脇第三まであり。(宮正 ①)

一月二十二日 將軍徳川綱吉の厄年祈祷の千句連歌開始。(宮正 ①)

二月八日 能東・能林・能什・能吟、將軍に献上の厄年祈祷千句連歌を清書。(宮正 ①)

二月十二日 本年中は、綱吉の厄除のため毎月十六日に連歌百韻をなすこと、衆中に申し渡しあり。(宮正 ①)

二月十三日 学堂講釈、続いて前句付の会あり。(宮正 ①)

二月十七日 学堂連歌の会あり。(宮正 ①)

二月十八日 綱吉厄除祈祷連歌あり(この会は毎月十六日といっても十八日にも行う由あり(二月十七日条))。

(宮正 ①)

二月二十四日 法楽連歌満座。(宮正 ①)

三月九日 將軍徳川綱吉厄除祈祷連歌を所司代土屋政直に献上(宮正 ①)

三月十七日 学堂連歌の会あり(三月六日の分)。(宮正 ①)

- 四月四日 学堂にて祈祷の連歌あり。(宮正 ①)
- 四月六日 学堂月次連歌あり。(宮正 ①)
- 四月十日 学堂前句付あり。(宮正 ①)
- 四月十日 能順、初何百韻を詠む。連衆は能順と政右。「頃や誰ことくさも子規」。(小 ② p26)
- 四月十七日 学堂にて連歌百韻あり(東山天皇 御即位御祈祷連歌)。(宮正 ①)
- 四月十八日 綱吉厄除祈祷連歌延期。(宮正 ①)
- 四月二十日 祠堂のねたみありて、御即位御祈祷連歌の懷紙を献上せず。(宮正 ①)
- 四月二十四日 学堂にて綱吉除厄御祈祷連歌あり(十八日延期分)。(宮正 ①)
- 五月三日 学堂月次連歌あり(四月二十三日分)。(宮正 ①)
- 五月六日 学堂月次連歌あり。(宮正 ①)
- 五月十日 学堂前句付あり。(宮正 ①)
- 五月十六日 綱吉厄除祈祷連歌あり。(宮正 ①)
- 五月十七日 学堂月次連歌あり。(宮正 ①)
- 五月二十三日 学堂月次連歌あり。(宮正 ①)
- 六月六日 学堂月次連歌あり。(宮正 ①)
- 六月八日 学堂連歌あり。(宮正 ①)
- 六月十一日 天下御祈祷連歌あり。(宮正 ①)
- 六月十六日 学堂にて綱吉除厄御祈祷連歌、十八日に延引。(宮正 ①)
- 六月十七日 学堂月次連歌あり。(宮正 ①)
- 六月二十三日 学堂月次連歌あり。(宮正 ①)

- 七月四日 学堂月次連歌あり（七月六日分）。(宮正 ①)
- 七月十七日 学堂月次連歌あり。(宮正 ①)
- 七月十八日 綱吉厄除祈禱連歌あり。(宮正 ①)
- 八月四日 学堂連歌あり。(宮正 ①)
- 八月六日 学堂月次連歌あり。(宮正 ①)
- 八月十日 学堂前句付あり。(宮正 ①)
- 八月十六日 学堂にて綱吉除厄御祈禱連歌あり。(宮正 ①)
- 八月十七日 学堂月次連歌あり。(宮正 ①)
- 九月六日 学堂月次連歌あり。(宮正 ①)
- 九月十八日 学堂にて綱吉除厄御祈禱連歌あり。(宮正 ①)
- 九月二十三日 学堂月次連歌あり。(宮正 ①)
- 十月六日 学堂月次連歌あり。(宮正 ①)
- 十月十日 学堂前句付あり。(宮正 ①)
- 十月十六日 学堂にて綱吉除厄御祈禱連歌あり。(宮正 ①)
- 十月十七日 学堂月次連歌あり。(宮正 ①)
- 十月二十三日 学堂月次連歌あり。(宮正 ①)
- 十一月六日 学堂月次連歌あり。(宮正 ①)
- 十一月十日 学堂前句付あり。(宮正 ①)
- 十一月十七日 学堂月次連歌あり。(宮正 ①)
- 十一月十八日 学堂にて綱吉除厄御祈禱連歌あり。(宮正 ①)

十一月二十三日 学堂月次連歌あり。(宮正 ①)

十二月四日 能通より、借銀の質物に入れ置いた宗祇の筆跡をしばらく借りたいとの申し出あり、貸す(十二月六日に返却)。(宮正 ①)

十二月六日 学堂月次連歌あり。(宮正 ①)

十二月十日 学堂前句付あり。(宮正 ①)

十二月十六日 学堂にて綱吉除厄御祈祷連歌あり、結願。(宮正 ①)

十二月十七日 学堂月次連歌あり。(宮正 ①)

十二月二十三日 学堂月次連歌あり。(宮正 ①)

貞享五年(九月晦日に元禄元年に改元 一六八八) 六十一歳

一月六日 学堂月次連歌あり。(宮正 ①)

一月十日 学堂前句付あり。(宮正 ①)

一月十七日 学堂月次連歌あり。(宮正 ①)

一月二十二日 宮仕親子書、門跡に提出前下書写しあり。「能順能舜子」(宮正 ①)

二月二十四日 学堂にて神具調進法楽連歌あり。(宮正)

二月晦日 自筆遺言状をしたためる。(小松天満宮蔵 石歴展90)

三月 能順、賀州山代湯本において政在・可春と三吟連歌をなす、政在発句「山白く明ほの匂ふさくら哉」。

(含連 ⑥)

三月九日 学堂月次連歌あり(六日の延引分)。(宮正)

三月十日 学堂前句付あり。(宮正)

三月十七日 学堂月次連歌あり。(宮正)

三月十八日 学堂前句付あり(先月十日延期分)。(宮正)

三月二十三日 学堂月次連歌あり。(宮正)

三月 賀州山代湯本にて政在、可春と三吟百韻。発句「山白く明ほの匂ふさくら哉」(政在、能順は第三に

出詠)。(阪⑥)

春

『能順自筆発句書留』に発句20ゝ31あり。⑦

「桜の花盛之会ニ／思ひしも此一本そ花盛」(20 聯156)

「本多氏政在亭会／せき入て庭や山水山桜」(21 聯234)

「井上氏長貞会／折袖や四方に散行山桜」(22 聯238)

「瑞順・重幸三吟／身をよせよいとほし花も老の陰」(23 聯198)

「花に風かつゆるさるゝ匂ひかな」(24)

「今枝氏直方亭ニ而／松栢の庭や太山の初桜」(25 聯226)

「竹田氏忠張別所之花ヲ見て／今日来すは花もおもはん色香哉」(26 聯158)

「糸桜／誰かいはん花に染たる糸桜」(27 聯253)

「井上氏長貞柴屋文台ヲ／写テ此発句をと有ニ／花の詠柴の屋残る木陰かな」(28 聯174)「柴屋の文台開に」

「於江沼郡山代湯本／世の外の春をも太山桜かな」(29)

「於同所三月尽／行春も今夜や旅の相舎」(30)

「於同所／初花の若葉に残る木の間哉」(31)

学堂月次連歌あり。(宮正)

四月六日

四月八日 能春屋敷は、以前能舜が所持。(瑞俊書付(宮正))

四月九日 学堂前句付あり(九日の分)。(宮正)

四月十七日 学堂月次連歌あり。(宮正)

四月十九日 学堂にて名付連歌興行あり(二十一日にも)。

四月二十四日 学堂月次連歌あり(二十三日分)。(宮正)

五月八日 能通室入れの宗祇手跡、返却。(宮正)

六月六日 学堂月次連歌あり。(宮正)

六月九日 学堂にて連歌あり。(宮正)

六月十七日 学堂連歌、講尺、能貨坊死去につき五十日延引。(宮正)

夏 『能順自筆発句書留』に発句32〜35あり。⑦

「花をなと若葉に来鳴郭公」(32)

「本多氏政在亭ニ而月次始ノ言種の花も猶みん茂り哉」(33 聯475)

「寺西氏直行興行ノ夏虫の夕景草や今朝の露ノ異は露もなしノ後ニ今朝の露ト替タリ」(34 聯481)

「能貨追悼ノ夏虫も人の世おしむ鳴音哉」(35)

学堂にて連歌あり。(宮正)

学堂普請中のため、能慶宅にて連歌あり。(宮正)

前句付あり。(宮正)

学堂月次連歌あり。(宮正)

学堂前句付あり。(宮正)

学堂月次連歌あり。(宮正)

八月四日

八月十日

八月十七日

八月十九日

九月六日

九月十日

学堂前句付あり。(宮正)

九月十七日

学堂月次連歌あり。(宮正)

九月二十三日

学堂月次連歌あり。(宮正)

秋

『能順自筆発句書留』に発句36く41あり。⑦

〔前田左京招請ニ付／まねかてもとはまし宿の花薄〕(36 聯582 問はや宿の)

〔よしやふれ月は在明宵の雨〕(37 聯633)

〔歛生庭ニテ／みたれすは露もかゝらし萩薄〕(38 聯561)

〔名月／迎も身は老けり今夜秋の月〕(39 聯692)

〔横山氏々從亭ニ而／雲風の色は時雨のゆふへかな〕(40)

〔前田半七直□亭ニ而／木の間より月の散来る紅葉哉〕(41)

十月六日

学堂月次連歌あり。(宮正)

十月十日

学堂前句付あり。(宮正)

十月十七日

学堂月次連歌あり。(宮正)

十月二十二日

学堂前句付あり。(宮正)

十月二十三日

学堂月次連歌あり。(宮正)

十月二十八日

普請立願連歌あり。(宮正)

十一月十日

学堂前句付あり。(宮正)

十二月二十三日

学堂月次連歌あり。(宮一)

冬

『能順自筆発句書留』に発句42く44あり。⑦

〔佐野寿仙亭ニ而／是も又木葉音する霰哉〕(42)

「本多主殿政在亭ニ而／夕月夜汀の影や薄氷」(43)
 「前田万助知頼亭ニ而／河波の声／寒し夕千鳥」(44 聯988)

元禄二年(一六八九) 六十二歳

年預頭をつとめる一方、瑞順に小松天満宮別当をゆずる。この年秋は小松滞在。①③

閏正月六日 学堂月次連歌あり。(宮一)

閏正月十二日 学堂前句付并順講あり。(宮二)

閏正月十七日 学堂月次連歌あり。(宮一)

閏正月二十二日 前句付并源氏順講あり。(宮一)

閏正月二十三日 学堂月次連歌あり。明後二十五日の当番の能順へ葉茶廿目を渡す。(宮二)

閏正月二十六日 学堂月次連歌あり。(宮一)

二月四日 学堂にて能東の源氏講釈あり。(宮一)

二月十四日 学堂月次連歌あり。(宮一)

二月十七日 学堂月次連歌あり。(宮一)

二月二十日 学堂月次連歌あり。(宮二)

二月二十三日 学堂月次連歌あり。(宮一)

二月二十八日 学堂月次連歌あり。(宮一)

三月六日 学堂月次連歌あり。(宮一)

三月十二日 学堂前句付あり。(宮一)

三月十七日 学堂月次連歌あり。(宮一)

三月二十三日
春

学堂月次連歌あり。(宮一)

『能順自筆発句書留』に発句45〜51あり。

〔命也うれしき世にも今日の春〕(45 聯10)

〔本多安房政長卿古松梅アル文台／開 四吟之連哥ニ／梅か香や古き風吹宿の松〕(46)

〔鳥井に松梅書タル／御影之讚／梅に匂ひ松に木ふかし神慮〕(47 聯29)

〔横山氏々從亭ニ而／瀬の声に添行山の雪間哉〕(48)

〔本多氏政在亭ニ而／露に見よ柳か上の春の雨〕(49)

〔森氏三宣亭ニ而／夕霞音にこそなれ夜の雨〕(50 聯65 「音になりけり」)

〔本多氏政冬亭／色も香もいかに教し家桜〕(51 聯258 「外に見ぬ色やおしへし」)

四月六日
学堂月次連歌あり。(宮一)

四月十四日
学堂前句付あり。(宮一)

四月十七日
学堂月次連歌あり。(宮一)

四月二十三日
学堂月次連歌あり。(宮一)

五月六日
学堂月次連歌あり。(宮一)

五月二十日
学堂月次連歌あり。(宮一)

五月二十三日
学堂月次連歌あり。(宮一)

六月九日
学堂月次連歌あり。(宮一)

六月十一日
御講連歌あり。(宮一)

六月二十三日
学堂月次連歌あり。(宮一)

六月二十七日
学堂月次連歌の懈怠を補う。(宮一)

『能順自筆発句書留』に発句52く58あり。**⑦**

「佐藤治兵衛ニ而興行ノ誰により忍ふ初音そ時鳥」(52)

「慈雲寺日祥興行ノ思ひ入山路は知や郭公」(53 聯316題「郭公」)

「山にても聞すはいつち郭公未」(54 聯361「山寺の人のもとへ」)

「河合三平尹信興行ノ月になけさらは雲井の時鳥」(55 (ただし55は全抹消済、興行先の情報を持つのでこれを示す) 聯350「山踏せし時 高根にのほりて」)

「佐藤儀左良成興行ノ花よりも老は慰む若葉哉」(56)

「板津久七郎直景宅ニ而ノ当座ノ空吹て木の下露や夏の雨」(57)

「政右別所をしつらひて始ノ会ノ興行ニノ涼しさやしつらひ裁し宿の松」(58 聯445「新宅にて」)

元故と両吟の山何百韻を詠む。発句能順。発句「梶の葉に書言種の露もかな」。(含連(阪) **⑥**、快能

(小) **②** p26) (聯515)

七月七日 前句付、五月六月両月の会あり。(宮一)

七月十日 学堂の会あり。(宮一)

七月十七日 学堂前句付勘定あり。(宮一)

七月二十二日 学堂月次連歌あり。(宮一)

七月二十三日 学堂月次連歌あり。(宮一)

八月二日 御祭連歌を学堂にて興行。(宮一)

八月四日 学堂月次連歌あり。(宮一)

八月六日

小松にて芭蕉と会うか。同時代の記録類などの資料はないが、後代『とはじぐさ』(明和七年(一七七〇)などに逸話が見られる。(5) **③** B)

八月十日 学堂前句付あり。(宮一)

八月十五日 十五夜の発句を詠む。「十五夜／一年に月待出し今夜かな」(書留65 (小) ⑦ 聯682「月待出る」)

八月十六日 十六夜の発句を詠む。「十六夜／出て月空にいきよひの曇哉」(書留66 (小) ⑦ 聯673)

八月十七日 学堂月次連歌あり。(宮一)

八月二十三日 学堂月次連歌あり。(宮一)

八月二十六日 二十六夜の発句を詠む。「廿六日 河原兵庫／またて見る月は有明の寢覚哉」(書留69 (小) ⑦ 聯674)

〔二十六夜〕

八月二十七日 学堂にて能拝の発句で若衆の連歌興行あり。(宮一)

二十七日の発句を詠む。「晦日 渡部氏 寛／月もなき夜の色也荻の声」(書留70 (小) ⑦ 聯675「二十

七夜」〔秋の色なり〕

八月二十九日 学堂にて能東の発句で若衆の連歌興行あり。(宮一)

初秋 能順、訪れた生駒万兵衛と連歌。発句「生駒万兵衛被来しに／雨にとふ心そ心宿の秋」(書留(小)

⑦ 59 聯818「雨の日訪来し人に／雨にとふ心そこゝろ秋の宿」

九月六日 学堂月次の会あり。(宮一)

九月八日 発句を詠む。「八日菊 井上氏長貞／盛待今日や限なき菊の色」(書留72 (小) ⑦ 聯729「九月八日

二」〔盛なる〕

九月十日 学堂前句付あり。(宮一)

九月十五日 能順、誓円寺の三千日念仏回向に出席。「誓円寺三千日念仏回向之砌／紫の雲はさほるな胸の月／又

は雲をもはらへ」(書留75 (小) ⑦ 聯668「千日念仏の座にて」〔雲はさはらし〕

九月二十七日 学堂月次の会あり(当月六日の分)。(宮一)

『能順自筆発句書留』に発句 61く 64、67く 68、71、73く 74あり。⑦

〔横山氏従／鹿の音や山立出る夕嵐〕(61 聯 568)

〔粟崎より立山をみて／秋の色目にたち山や雲の上〕(62 聯 826 「越中立山を遙に見て」)

〔湖水の月を／月出て空なる水の光哉〕(63 聯 641 「粟か崎にて」)

〔昼静亭二而／山窓に開き出るや四方の秋〕(64 聯 774 「山窓を」)

〔会 森氏三宣／白露に吹なす風の葛葉哉〕(67 聯 619 題「葛」)

〔湯原応信／風露の荻にかたよる夕かな〕(68 聯 590)

〔本多氏政在妻懐旧／誰袖か露のかゝらぬ草の原〕(71 聯 540 「仵人のもとへ」)

〔岡島氏元為亭／遠山や爰に木間の村紅葉〕(73 聯 747)

〔風未出ふけは月晴くもる木間哉〕(74 聯 657)

十月六日
学堂連歌の会あり(先月二十三日延引の会の分)。(宮一)

能順上洛。⑦③

十一月二十八日
能順、能観、能林の三人が松梅院に参上する。(宮一)

十一月二十九日
松梅院、妙藏院、徳勝院、友世、能順、能観が高辻殿に参上する。(宮一)

十一月三十日
年預請取渡しの事、次の年預能順宅に渡す。(宮一)

十二月一日
能順、十二月一日から一年間、元禄三年十一月晦日まで、年預頭をつとめる。⑦③①(宮一)

十二月二日
能順、能観が高辻豊長に参上する。(宮一)

十二月三日
目代友世宅にて、門主(曼殊院良尚)より昨秋の祈祷の礼に酒振舞あり、能順はじめ十人の衆中が参

上する。(宮一)

十二月六日
学堂月次連歌あり。(宮一)

十二月九日 学堂連歌あり。(宮一)

十二月十日 学堂前句付あり、点者能順。(宮二)

十二月十一日 学堂連歌あり。当人は能也。(宮二)

十二月十七日 学堂月次連歌あり。能東が勤める。(宮二)

十二月二十三日 学堂月次連歌あり。能東が勤める。(宮二)

冬 『能順自筆発句書留』に発句76、82あり。⑦

「しのはらや旅のうきふし村時雨」(76)

「於大坂川口／難波津や今も春への神無月」(77 聯 835 「大坂にて」)

「同所九昌院二而／木の葉のみ塵とは見えつ寺の庭」(78 聯 861 「山寺へ詣ける比」 「塵とは見えす」)

「直之興行／朝霜の花に鳥鳴垣根哉」(79 聯 877)

「素久両吟／薄雪の月に澄行夕かな」(80 聯 914)

「好治両吟／松は今朝みゆらん物を宿の雪」(81 聯 904)

「和州菅原ノ御社奉納／素久興行三吟／音すみて松風さむし神の庭」(82 聯 985 「古き社に詣て」)

元禄三年(一六九〇) 六十三歳

一月一日 能順、「三臈ニ成て／守すはあはまし今日か神の春」(書留 83 (小) ⑦ 聯 12) を詠む。

一月六日 学堂月次連歌あり。能順が勤める。(宮一)

一月十日 学堂前句付あり、点者能順。(宮二)

一月十一日 学堂連歌あり。当人は常久。(宮二)

一月二十五日 一乗寺に能順、能観、常久、友世が参上。刑部卿より、宮仕中、旧功の上座五人に直綴を許すとの御

- 門主の意向を聞く。(宮一)
- 二月六日 学堂月次連歌あり。能順が勤める。(宮一)
- 二月九日 学堂一二付之連歌あり。(宮一)
- 二月十日 学堂前句付あり、点者能順。(宮一)
- 二月十一日 学堂連歌あり。当人は能樂。(宮一)
- 三月十一日 学堂連歌あり。当人は能覚。(宮一)
- 春 『能順自筆発句書留』に発句84〜101あり。⑦
- 『大森氏好治へつかはす／鶯や夜をほのめかす窓の竹』(84 聯90)
- 「雨もよに曇も花のたより哉」(85)
- 「於東山 杉間の花と云事を／山下風ふけは桜の杉間かな」(86)
- 「同所二而枕の山桜と云事を／見はやみし夢の枕の山桜」(87)
- 「久須見常円へ遣ス／奥ふかき花の心や山桜」(88)
- 「尋来る心を太山桜かな」(89 聯231)
- 「自黙・好治三吟／家土産に四方の花散都かな」(90 聯187「朝かな」)

「都へのほる 錢別に歎生と両吟」(聯239) (91句は抹消されており、元禄七年春292(聯239)に同じ句「花毎におもひ出へき桜かな」を掲出、ただし⑦において二首の歌に別々に292番がふられている(すでに91という番号があるため重複を避ける意図か、不明)。⑦に従い292以後の句の番号は変えていない)

「散行もまたれし花の心かな」(92 聯178)

「言葉や人の心の春の花」(93)

〔陰高し此一本や山桜〕(94)

〔人の為花は植まし老の春〕(95) 聯197)

〔山土産を頼むや老の桜狩〕(96) 聯236 「にし山の花見に出し人の許へ／山土産を頼むや老のさくら

駈)

〔言葉や見るにまされる花の色〕(97)

〔妙心寺桂周院龍海転位ノ賀儀／色そへん藤の下染すみれ草〕(98)

〔於宇治興聖寺／秋さへやいひし花園春の色〕(99)

〔宇治川や行春早し高瀬舟〕(100)

〔自黙・好治三吟／いたつらに春を古屋のなかめ哉〕(101)

〔比叡山にて／子規爰を雲井の高根かな〕(書留103(小) 7 聯332 「卯月の比大比叡にのほりて」)

能順、能東、能通、松梅院へ行き、桂天神社の取立について聞かれる。(宮二)

五条殿に提出の「宮仕年中行事覚」に、「毎月十一日連歌」とあり。(宮二)

五月 小河成章母の悼の発句をなす。「小河成章母悼／雲となり雨の哀の五月かな」(書留104(小) 7)

六月九日 学堂連歌あり。(宮一)

六月二十七日 小出淡路守社参、能順、能実、能什出向く。(宮二)

夏 上賀茂にて発句をなす。「賀茂にて／水清し岩本柏夏のかけ」(書留105(小) 7 聯499 「加茂の岩本の

社の涿にて」)

七月九日 能順の取次で銀壺貫目、万や権兵へから借りる。能順、随栄、能什印判。(宮二)

七月十二日 衆中に対し、銀三十目ほどでの千句興行依頼受取は禁止の旨、触れをまわす。(宮二)

八月四日 学堂連歌あり。(宮一)

七月九日
七月十二日
八月四日

八月十五日

十四日から十五日にかけて大雨、雷あり。「十四日雨、……午上刻ち大雨、終日及夜不晴、子下刻雷甚ノ明方に止」「十五日雨、夜中之雨故方々大洪水」(宮二) 能順、発句をなす。「名月大雨雷電ノ夜ノ人の心空なる月の今夜哉」(書留107(小)) ⑦ 聯690「人こゝろ」

八月二十日

能順と目代友世、両門主に対する雷雨大水見舞いの必要性を相談。(宮一)

九月十三日

「十三日晴」(宮一) 能順、発句をなす。「十三夜ノ有し夜に勝りかほ也秋の月」(書留108(小)) ⑦

九月二十七日

浅井政右、子息以政の死に愁傷、能順より吊いの発句をなす。「浅井政右子息以政にをくれてノ愁傷をとふらふとして 九月廿七日ノおもふらん露の世いかに袖の上」(書留109(小)) ⑦

秋

秋某日

父の能舜五十年忌に発句をなす。「能舜法師五十年忌ノわか身こそ古き形見の忍草」(書留60(小)) ⑦

聯618「能舜五十回忌」初句「老か身や」(書留においては60句は抹消されており、元禄三年、四年の作と棚町氏が推定された105から169の句群の中、106句と107句の間に再度掲出。)「懐旧連歌、発句「わが身こそ古き形見の忍草」(山北) ③ (山北には懐旧連歌の成立年月日に関する情報はない)

十月一日

能順発句あり。「十月一日ノ三冬てふ日数や今日は一時雨」(書留110(小)) ⑦

十月十日

前田利常三十三回忌、十日から十二日にかけて宝円寺にて執行(加藩史)。能順、発句を詠む。「微妙院殿三十三回忌ノめぐりきぬ其夜の時雨老の袖」(書留111(小)) ⑦

十一月三日

百日横目衆が社参、松梅院、能順、常久が会う。(宮一)

十一月六日

祈祷之千句あり、三百韻済む。(宮一)

十一月七日

祈祷之千句あり、四百韻済む。(宮一)

十一月八日

祈祷之千句あり、三百韻済む。(宮一)

十一月二十日

初雪連歌の会あり、当人は常円。(宮一)

十一月二十九日 年預能順から能歴へ受取を渡す。(宮一)
 冬 『能順自筆発句書留』に発句112と116あり。⑦

「好治二而当座一二付／霜白き落葉は月の桂哉」(112)

「素久二而同一二付／咲て梅いつはる春や神無月／(改)咲や梅春いつはらぬ神無月」(113)

「三宅庄兵衛重直二而／春秋の色にとられぬ冬木哉」(114)

「大森好治二而／雲風の色のもりや峰の雪」(115) 聯935初句「雨風の」、⑦棚町氏注に「能順自筆

「短冊」には「雲風の色のもりや峰の雪 能順」と記されている。

「身の外に思ひて暮す年もかな」(116)

某日 三宅重直夫婦へ祝いの発句を詠みやる。「三宅氏重直夫婦牡丹を／夢みて祝の心をとひしに／植し

うへて宿の契や深見草」(書留102(小) ⑦)

元禄四年(一六九二) 六十四歳

一月 年頭の発句を詠む。「身こそあれ心なふりそ花の春」(書留117(小) ⑦ 聯11)

一月一日 北野社にて歳旦発句の披講あり。(宮一)

一月二十四日 桔梗屋七左衛門から能順、能拜へ御神供等料として銀十枚寄進あり。(宮一)

二月一日 能順、能東、能観、友世、瑞禅、西田善右衛門、両門跡(曼殊院良尚・良応)のもとに参上。(宮一)

二月六日 能順、能東、能観、友世、玉松院、武右衛門(松梅院家老)、両門跡のもとに参上。(宮一)

二月十一日 能順、能東らが御公儀へ参上。(宮一)

二月二十八日 能作の家普請について、能順・能拜より、延期を勧める。(宮一)

三月二十二日 衆中の名次第、能楽より友世に持参。能順に頭注「五三日中ニ賀州へ罷下り申候」。(宮一)

三月二十四日

能順、年預能歴に近日中に加賀に下向予定と伝える。(宮一) ①

三月尽

帰山の辺にて発句を詠む。「帰山ノ辺ニ泊りて 三月尽ノ我もいさつれなん春の帰山」(書留126)

春

⑦

『能順自筆発句書留』に発句118、125あり。⑦

「好治両吟ノ梅柳風をあらそふ色香かな」(118)

「比叡山ニむかへる庭ニ而ノ猶残る雪におもへは高峰哉」(119後 聯72「台麓にて」「雪をおもへは」)

「渡部宗堅・好治三吟一折ニ梅か香に雪の塵(マユ)かふ袂哉」(120前)

「好治柴屋写文台開ニノその詠いかに柴屋の山桜」(121)

「於仁和寺ノいつれ雲大内山の山桜」(122)

「散花を見は山寺の夕哉」(123)

「梅宮ニ而ノ桜花咲継梅の宮居かな」(124)

「北国ニ下向 山中ニ而ノ行心花にしたかふ山路かな」(125)

四月か

歛生興行の宗祇像開で、発句を詠む。「世々に聞名もいや高し郭公」(書留127(小) ⑦ 聯346「祇公墨蹟開」)

能順、政右が山代温泉に入湯の時、句を送る。「政右山代入湯之時分 云遣スノ山里の伝たにゆかし

郭公」(書留128 聯326「山里人のもとへ」「伝たに嬉し」)

五月六日

学堂月次連歌あり。(宮一)

五月十七日

学堂月次連歌あり。(宮一)

五月二十八日

預能海死去(八十歳)、新預は随吟。(宮二)

五月二十九日

預坊発句の連歌奉備。(宮二)

五月

六月七日

「九津屋次郎右衛門了武興行／白雲を雨の五月の光かな」（書留129 聯384）
 小松で何衣百韻に出座。（元故、瑞順、能順の三吟。能順第三句に出座）。発句元故「雪遠く夏川流す

白根哉」（（快能）⑤、（小）② p26）

六月九日

学堂月次連歌あり。（宮一）

六月十一日

学堂月次連歌あり。（宮一）

六月十七日

学堂月次連歌あり。（宮一）

六月二十二日

学堂月次連歌あり。五月二十三日の補い。（宮二）

六月二十四日

学堂月次連歌あり。六月二十三日分。（宮一）

夏

『能順自筆発句書留』に発句130く143あり。⑦

「今枝氏直方娘ノ悼／露を袖の名残に消し螢」（130）

「牧屋久兵衛正幸興行／影見えて取とめぬ風の螢哉」（131 聯402）

「能美屋太郎右衛門一茂興行／蟬の音に戦く露散木陰哉」（132 聯416題「蟬」）

「本多政長卿興行／陰に守氷室や同し松の雪」（133 聯502）

「本多政在卿／露をおもみ風待あへぬ蓮哉」（134 聯428）

「長瀬湍兵衛／常磐木の時も有けり下涼み」（135 聯454）

「横山氏従／螢さへ添て玉飛泉哉」（136 聯407「つれて玉とふ」）

「佐藤治兵衛／白露をあつめてこほす蓮哉」（137 聯427題「蓮」）

「前田知頼／瀬の声は秋風近き夕哉」（138 聯510）

「月次始 政右／茂れ猶言の葉風の下涼み」（139 聯455「政右の許にて月次会始二」）↓山『連歌集』

（169）では元禄四年六月十五日、能順（発句）、政右（脇）、應信、武康、正好らの百韻。

「慈雲寺／常磐木の下露重し夏の雨」(140参考 聯503「山寺にて雨いたふ降ければ／太山木の下露寒し夏の雨」(140 聯503)

「湯原応信／取とめぬ風ならなくの扇かな」(141 聯434題「扇」)

「板津直景／絵にかけは草木も風の扇哉」(142 聯436「草木の風の」)

「夕貞さけるあたりにて／夕貞のはつかしけなる小家哉」(143)

七月六日
寄合にて、学堂の勤め、衆中懈怠あるゆえ、年寄名で書付を学堂に張り出す相談。「連歌は神道之根本」「懈怠なかれ」との内容。(宮一)

七月四日
学堂の式日、六日の連歌あり。(宮一)

七月六日
学堂月次連歌の出欠状況につき、懈怠があるので、書付を貼り、出席の面々に名を書かせ点をかけさせることで出欠の様子を示す。(宮一)

七月十七日
学堂月次連歌あり。(宮一)

七月二十三日
学堂月次連歌あり。(宮一)

七月
何路百韻に出席。発句政右「下荻の声聞あへぬ柳哉」。能順第八句に出詠。(快全(小) ⑤、② p26、山

『連歌集』(156)では「元禄四年八月十三日月次」

八月十一日
学堂御講あり。当人能順。(宮一)

八月十五日
名月の会連歌興行。当人能林。年預能歴は内々の会と理解。

八月十七日
学堂月次連歌あり。(宮一)

八月二十四日
去年二月二十四日の連歌、懈怠ゆえ来る二十七日になすと衆中に触れあり。(宮一)

八月二十七日
学堂にて去年の二月二十四日の連歌あり。(宮一)

八月二十九日 学堂にて当月二十三日分の月次連歌あり。(宮一)

閏八月六日 学堂月次連歌あり。(宮一)

閏八月十日 浅井政右(素庵) 追善の独吟百韻をなす。発句「なれし世や恨にかへる老の秋」(書留154)(小) ⑦、

聯815「浅井政右の悼」、快能(小) ⑥ 小② ③、「同会ニ／玉よはふこたへや化し袖の露」(書留155)(小) ⑦、聯534「浅井政右の身まかり給ふ悼ニ」「こたへもあたし」

閏八月十二日 能仕、老年ゆえ、連歌の儀の取持を頼む。(宮二)

閏八月十四日 学堂前句付あり(八月十日分)。(宮一)

閏八月十七日 学堂連歌あり。(宮一)

閏八月二十三日 学堂連歌あり。(宮一)

九月十七日 学堂月次連歌あり。(宮一)

秋

『能順自筆発句書留』に発句144、163あり。 ⑦

「正□両吟／身にそしむみぬ色ふかし秋の風」(144) 聯775)

「長瀬善右衛門／さ夜更て月しつまるや荻の露」(145)

「宮丸や成正／朝貞は露の花なる匂ひ哉」(146) 聯612題「槿」

「安房殿ニ而／一村に千種もなひく薄哉」(147) 聯579)

「半田五郎左殿悼／稻妻の影にしほる、袂哉」(148) 聯811「北野松梅院尚禅の悼」「露をと、むる」

「天神講御作代／桜葉の宮居時めく紅葉哉」(149) 聯756「北野桜葉の宮の月次に」「宮井ほのめく」

「名月／(改)より出し／今夜月秋を出ける光哉」(150) 聯678題「名月」「月今夜秋を出たる」

「湯原氏心信ニ而／白露に虫の音清き小篠哉」(151)

「松田助左衛門ニ而／一本に秋や庭もせ花薄」(152)

「浅井氏政右悼／袖しほる外なき露のうき世哉」(153) 聯 536 「悼人のもとへ」

「金沢ニ而、清持・既白三吟／峰の月汀まされる光哉」(156) 聯 642 「木場といふ所の江のほとりに／た

れかれ誘ひ出て 月見し時」

「踞道ニ而会／染るのみ色か草木の秋の風」(157)

「会／朝霧の花に晴行野風哉」(158) 聯 601 「花に成行」

「会／空にかよふ心也けり月の友」(159)

「十三夜／望月に光あらそふ今夜哉」(160) 聯 743

「政在卿ニ而／秋風の月は時雨の雲間哉」(161) 聯 651

「湯原源七ニ而／松の葉をもとかしけ也蔦紅葉」(162) 聯 786

「慈雲寺ニ而／鹿の音の薄に残る山田哉」(163) 聯 571

十月一日 中黒六左衛門の所の連歌で発句を詠む。「十月朔日 中黒六左衛門ニ而／夕暮の冬も来にける時雨か

な」(164) 聯 838 題「時雨」

十月五日 能順母(浄山玉清大姉)、京にて没す(九十五歳)。養子瑞順と小松にて母追善の両吟百韻。能順、発

句を詠む。「奉悼清山大姉／は、き木よ所に別る落葉哉」(書留167(小) 7) 聯 862 「京にて、慈母身

まかりしにも、えあはず、小松にて」「あはてむなしき」(能快歎書留 5) 発句「あはてむなしき」、②

p28 「あかてむなしき」③

十月十七日 学堂月次連歌あり。(宮一)

十一月十七日 学堂月次連歌あり。(宮一)

十一月二十三日 学堂月次連歌あり。(宮一)

十一月二十九日 年預能拝に渡す。(宮一)

十二月一日 初雪連歌の会あり、当人能林。(宮一)

十二月六日 能順の弟能拜死去(四臈行年五十八)。(宮一) ⑥

十二月十六日 松平丹後守に歌学者として仕えた板坂以得、書物八十余点を質草に金を借りる。若い宮仕たちから、

書物があれば書写したいとの希望あり。(宮一)

冬 『能順自筆発句書留』に発句165く166、168あり。⑦

「坂倉助太夫懐旧息善助興行／とふ道や木葉にふかき苔の下」(165)

「林助左衛門興行／霰にもあらそふならの枯葉哉」(166 聯891)

「昨日みし遠山風や今朝の雪」(168)

元禄五年(一六九二) 六十五歳

一月一日 年頭の発句を詠む。「老をこそおもふ事には今日の春」(書留169(小) ⑦ 聯14)

一月三日 松梅院の裏白連歌開催。(宮一)

一月十八日 何船百韻に出詠。

能順発句「晨明の夜なく霞む行衛かな」(能快全書留(小) ⑤、② p28)

「有明は夜なく霞む行衛哉」(快能(小) ② p26)

「三吟／有明は夜なく霞む行る哉」(書留182 ⑦ 聯140「政右・直忠三吟」)

能順、鈍色袷袢着用の願を聞き届けられず、秋に小松から上京する旨返信。(北②)

二月十九日 学堂において法楽連歌あり。(宮一)

二月二十四日 元日の発句の連歌興行。(宮一)

三月二十七日 春 『能順自筆発句書留』に発句170く181、183く185あり。⑦

- 五月十七日
 五月二十五日
 六月九日
 六月二十日
 六月二十四日
- 〔岡島元興／薄雪に見るく露の柳哉〕（170 聯101）
 〔竹の葉に梅か香戦く垣根哉〕（171）
 〔岡島伝蔵／山の端やしのめまかふ春の雪〕（172 聯73）
 〔横山外史／いそけ花遠さかり行峰の雪〕（173 聯151）
 〔今枝直方／紅に咲こそうつれ梅花〕（174）
 〔月次 浅加治卿／待初る心の奥や八重桜〕（175 聯241）
 〔湯原応信／白露や緑すくろの村薄〕（176 聯116）
 〔生駒万兵衛／花の中に花咲出る桜哉〕（177 聯227）
 〔林助左衛門／花といへは先おもはるゝ桜哉〕（178 聯232）
 〔高岡慈雲老父悼／袖の色や堅野のかたみ夕霞〕（179）
 〔貞鳥の枝や氷し玉柳〕（180 聯110）
 〔本多安房殿江戸下向 主殿々／より懐紙可被贈二付／咲花も春のもとたつ東かな〕（181 聯147）
 〔待人の遅く来れるニ／散にけり問来る人の遅桜〕（183 聯268）
 〔佐藤儀左衛門良成悼／花をさへ見果ぬ夢の恨哉〕（184）
 〔高畠源蔵友徳会／花盛霞も風も匂ひ哉〕（185）
 学堂月次連歌あり。（宮一）
 井筒屋、錢屋了喜の取次にて銀子二枚寄進する。（宮一）
 学堂連歌あり。（宮一）
 学堂月次連歌あり（当月十七日分）。（宮二）
 能順の妹西雲死去。（宮一）

六月二十六日

学堂前句付あり。(宮一)

夏

『能順自筆発句書留』に発句186〜192あり。⑦

井筒屋庄兵衛興行の連歌で発句を詠む。(「井筒屋庄兵衛一正興行／露落て色はかほかぬ若葉哉」(書

留186 (小) ⑦)

「塩屋長右衛門祐以興行／聞ましや今幾日有て郭公」(187 聯345)

「半田氏正好家尉祝詞／植し世の根さし木ふかき若葉哉」(188 聯298)

「政在公ニ而／雨に今日とはすはいつの時鳥」(189 聯319)

「夕暮や秋は朝露若楓」(190 聯309題「若楓」 「夕暮の秋やあき露」)

「田上屋昌忠興行／河音につもるや雨の五月山」(191 聯386「川音の」)

「半田氏正好四吟／五月雨の空たのめなる晴間哉」(192)

学堂前句付あり。(宮一)

七月十日

七月十九日

如鉄の三十三回忌に、脇田七兵衛が興行した連歌の発句を詠む。「如鉄三十三回忌 脇田七兵衛／興行

七月十九日／手向にもつむや其世を忍草」(書留(小) 195 ⑦)

八月一日

能州一宮に発句を手向ける。「八月朔 能州へ趣テ／一宮ニ奉手向／松杉や神の太山木世々の秋」(書

留(小) 196 ⑦ 聯827「一とせ能州一見にめぐりし時、一宮にて手向」)

連続して阿部屋の浦、福浦の磯、黒崎の磯、深見の滝、深見か浦、惣持寺、乙ヶ崎、七尾、今浜の句

あり。(書留196〜206 (小) ⑦、聯827〜832、548、549、599) ※八月に能登の旅をしている。

連歌の書付を神前にそなえる。(宮一)

八月四日

八月六日

能順、懐旧百韻を詠む。連衆は能順、孟昭。「憂かりけり是や昔を忍ふ草」(小②)

八月十日

学堂前句付あり。(宮一)

八月十日 能林・能什、二十三日の学堂月次連歌の宗匠のことを申しわたされる。(宮一)

八月十七日 学堂月次連歌あり。(宮一)

八月二十一日 六月十六日に願書のあつた千句の習礼あり。(宮一)

八月二十三日 月次連歌延引。(宮一)

八月二十七日 年預のところて千句の内の五百韻をなす。(宮一)

八月二十八日 千句のうちの五百韻をなす。(宮一)

九月十五日 学堂月次連歌あり(当月六日の会を延引)。(宮一)

九月二十三日 学堂の月次連歌あり。(宮一)

秋 『能順自筆発句書留』に発句193く194、197く206あり。⑦

〔横山氏隼人殿二而／涼しさの月にもり来る木間哉〕(193)

〔竹森檢校春林興行／荻葉をこほるゝ露の始哉〕(194 聯 589)

〔阿部屋の浦／松原の秋や塩屋の夕煙〕(197 聯 828)

〔福浦の磯／秋風や爰に入ぬる磯の松〕(198 聯 829)

〔黒崎の磯／秋風の波のあら磯岩もなし〕(199 聯 831)

〔深見の滝／山高し雲間霧間の滝つ波〕(200)

〔立田姫おしむか染ぬ滝の糸〕(201 聯 830)〔深見か浦〕

〔惣持寺／夕暮や秋より外の太山寺〕(202 聯 832)

〔乙ヶ崎／磯の上かたらん松の秋もなし〕(203)

〔七尾／此うらと雁も来にける渚かな〕(204 聯 723)〔能州七尾にて〕〔此浦に〕

〔朝霧に島はうかひて波もなし〕(205 聯 549)〔おなしく七尾にて〕

秋頃

「今浜／浜荻や爰にこたふる興津なみ」(206 聯 599 「能州今浜にて」)

素庵居士(浅井政右)一周忌に「一むらの薄や其名しのふくさ」(聯 616)を詠む(前年閏八月十日に政右追善独吟百韻を詠んでいる)。

津田正忠の三十三回忌に発句「うかりけり是やむかしを今の秋」(聯 812)を詠む。正忠は万治三年(二六六〇)没。

十月二十三日 学堂の月次連歌あり。(宮一)

十一月五日 学堂初雪の連歌の会あり、当人能知。(宮二)

十一月六日 学堂月次連歌あり。(宮一)

十一月十日 学堂前句付あり。(宮一)

十一月十一日 天神講(宮一)

十一月十五日 門主疱瘡につき、神前祈祷及び祈祷連歌百韻あり。発句(「はらふ跡つけぬや清き雪の庭」)「御」脇

随吟、第三能歴。(宮一)

十一月十八日 学堂月次の会あり。(宮一)

十二月十日 学堂前句付あり。(宮一)

十二月二十三日 学堂月次連歌あり。(宮一)

冬 『能順自筆発句書留』に発句 207 ～ 223 あり。 ⑦

「半田氏正好興行／深緑松にあつまる冬野哉」(207 聯 984)

「岡島氏一重興行／篠の葉の霰をこほす霰哉」(208 聯 889 題 「霰」)

「岡島氏元興々行／匂へ梅誰春ならぬ神無月」(209)

「さ夜更て霜にしつまる木葉哉」(210 聯 859)

某日

「冬枯の色にかたよる薄かな」(211 聯 870)

「竹田氏忠張閨東より帰宅ノ刻ノ待来しや言葉つもる雪の友」(212 聯 953 「友の尋来しに」「待えしや」)

「渡部氏寛庭をつくろはれたるニノ松を植て今朝こそ庭に峰の雪」(213 聯 905 「松を置て」)

「高畠氏友徳興ノ行ノ月と雪いつれノ光かな」(214 聯 919)

「有明の光や幾重今朝の雪」(215 聯 907)

「前田氏知頼ニ而ノ音絶て色に成行霏かな」(216)

「直忠ニ而三吟ノ明ほの、白きかきりや月と雪」(217 聯 918)

「安房守殿御母上十三回忌ノ淡雪のあはれ木ふかしうなひ松」(218 聯 947 「南昌院殿十三回忌」)

「空晴て松より出る雪吹哉」(219 聯 980)

「多賀信濃殿始而会ノ猶とはん道つけ初つ雪の宿」(220 聯 954 「跡つけ初し宿の雪」)

「多賀与一右衛門殿会ノつもれ猶齡木高き松の雪」(221)

「生駒氏正信息女悼ノ淡雪の哀にぬる、袂かな」(222)

「森氏三宣亭ニ而ノ埋火はうはの空吹風哉」(223 聯 991 「埋火の空ふく小夜の」)

百韻「袖毎の世の風匂ふ菖蒲哉」(能順・元胡) (小 ② p26)